特　集

聞こえの気づきを広げる「よるのむしのねずかん」

聞こえにくいことの理解を社会に広めたい、という思いは全要研会員に共通の思いではないでしょうか。全国に「眼鏡市場」を展開する（株）メガネトップでは、虫の鳴き声を楽しみながら「聞こえ」への気づきを与える冊子「よるのむしのねずかん」を制作、ウェブサイトでも公開しています。さらにこの「ずかん」を活用したワークショップを開催し「聞くことの楽しさ」「聞こえへの気づき」をすべての年代に広めようと活動しています。「よるのむしのねずかん」の開発とワークショップに携わる同社経営企画室広報グループの掛本紀子さんにお話をききました。

補聴器を扱う企業としてできること

――「よるのむしのねずかん」はどのようなコンセプトで生まれたのでしょうか。

掛本　弊社は「眼鏡市場」という店舗を全国展開しています。眼鏡やコンタクトレンズなどの「見ること」と、補聴器の「聞くこと」にかかわっています。

企業としての社会貢献を考えたとき、私たちの事業に関連してできることを考えました。その中で、国内で聞こえにくさを感じている方は約 1,400 万人いること、そして補聴器などで聞こえのサポートをしている方は約 200 万人いるとわかり、ほとんどの方が聞こえで困っている、あるいは困っていること自体にも気づいていないのではないかと感じました。

加齢性難聴は、年齢とともに徐々に進行するため、聞こえにくくなっていることに気づきにくいと言われています。聞こえにくさを自覚していない方が「聞こえのチェックをやってみよう」と思う機会は非常に少なく、そういった問題に対し何かできることは無いか、「聞こえているか、聞こえていないか」や「困っているから聞こえのチェックをする」といったネガティブに捉えられがちな発想の経路ではなく、聞こえにくさを抱えている本人やその周囲の人たちが、みんなで楽しく過ごしている中で「あれ？」「音の高さによって、聞こえたり聞こえなかったりするな」という聞こえに対する気づきや、関心を高める機会になるようなものを考えよう、というところから「よるのむしのねずかん」の制作が始まりました。2020 年のことです。

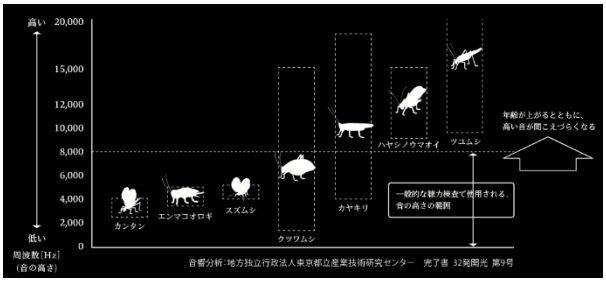
「虫の音」は誰にも身近な存在

――スズムシなどの虫の音というアイデアはどこから出てきたのですか？

掛本　虫の鳴き声を使った理由は、昔も今も私たちの身近にある音だからです。高齢者の方が若い時に聞いたことがあり、お年を召された今も周りにあり、さらに今の若い方にも同じように聞こえるという共通点があります。

「楽しんで」がスタートなので、世代を超えて共感できるものを探しました。日本人は虫の音に季節や風流を感じ、記憶にも残りやすいものだと思いました。さらに、調べていくと虫の鳴き声には様々な周波数があることがわかりました。「この音までは多くの人が聞こえる、これ以上は聞こえなくなることがある」という体験をする

のにぴったりではないかと考えました。それで虫の図鑑という形で作ろうということになりました。ほかの音の候補や試作をしながら決めたわけではなく、制作メンバーでディスカッションをする中で「虫って、そういえば…」と、全員がひらめき、あっという間にまとまりました。



「よるのむしのねずかん」特設サイトのトップページ（上）エンマコオロギや、クツワムシなどの虫の音を体験できる（下）【音響分析：地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター　完了書 32 発開光 第 9 号】

――どのような形で制作し、広めていったのですか？

掛本　活動当初は、紙の冊子「よるのむしのねずかん」を制作し、希望者にプレゼントをする企画をしました。絵本のようなデザインで、見開きごとに特殊なインクで印刷された虫と QR コードを掲載しており、QR コードをスマートフォンで読み取ると、虫の鳴き声が聞こえる仕組みです。また、スマートフォンでフラッシュをたくと、絵本の特殊インクが反応して虫の姿が浮かび上がるようになっており、お子さんが楽しめる仕掛けも取り入れました。

そして、この冊子ではページが進むにつれて高い周波数の鳴き声を出す虫を配置しています。お孫さんは最後のページの虫の音まで聞こえるけれど、年齢があがるにつれて聞こえない音も出てきます。高齢者の方は最後のほうのページは「今、音が鳴っているの？」と感じるかもしれません。すると聞こえの状態にご自身でも、また周囲の方も気がつくという仕組みです。

この冊子版は、無料配布するという企画で希望者を募り、多数のご応募をいただき大好評のうちに終了しました。しかし、当初の理念からすると、もっと広く聞くことを楽しめる機会を提供したいと考えました。

そこで、2021 年は簡易版のワークシートを作り、ワークショップを開催しました。また、「よるのむしのねずかん」をどなたでも閲覧いただけるよう、ウェブサイトへ電子版を公開しました。

電子版やワークショップで広める

――多くの人の興味・関心を高めることが目的なんですね。

掛本　ワークショップでは虫の鳴き声を聞く体験を通して親子やご家族で聞こえに興味・関心を持っていただけるように工夫を重ねています。例えば、1 つの虫の鳴き声を聞いていただき「スズムシとツユムシの鳴き声、どちらだと思う？」とクイズ形式にして、お子さんに発言してもらったり、正解だと思うほうに手を挙げてもらったりしています。ワークシートに正解の虫のシールを貼れるようにもしています。参加いただいた方に聞いていただく虫の鳴き声も徐々に高い周波数のものを用意し、「聞こえた？聞こえない？」といった話題につながるような構成にしました。

ワークショップの様子

また、音が振動している様子を伝えるために、太鼓の皮のように黒いビニールをピンと張った上に塩をのせて、音を鳴らすとその音に合わせて塩が動く様子を見せる音の振動実験も行っています。そういったクイズや実験と共に音が聞こえる耳の構造などをお伝えしています。

参加したお子さんからは「いろいろな虫の音が聞けて楽しかった」「実験が面白かった」という声、大人の方からは「普段の何気ない音にも高低があり、高い音は高齢者には聞こえにくいことがあると知った」などの声をいただいています。

体験が終わったときに「音には聞こえる音や、聞こえない音もあるんだ」とか「帰ってから家族や友達と虫の音を一緒に聞いてみたい」と思っていただけたら幸いです。そのためワークシートにも QR コードがあり、いつでも虫の鳴き声が聞けるようになっています。

お子さんから大人まで一緒に楽しく学べるワークショップとなるべくバージョンアップを重ね、より多くの方が聞こえに関する情報に触れる機会となるよう、今後もワークショップを続けていく準備をしています。ご希望があるところにはお伺いしてワークショップを開催したいとも考えています。

ワークショップで虫の鳴き声の周波数をレクチャー（上）、音を目で見る理科実験（下）

関心のない人にも気づきを

――「よるのむしのねずかん」を通して掛本さんの意識に変化はありましたか？

掛本　今の部署に配属される前までの約 10 年間、眼鏡市場の店舗で勤務していました。店舗で聞こえに関するお問い合わせをお客様よりいただく中で、ご本人はもとより周囲の方々の関心が必要であり、聞こえという共有することが難しい事柄について理解を得ることの難しさを経験しました。

「よるのむしのねずかん」のワークショップには、「何か楽しいことをやっているな」とか「虫が好きだから」といったキッカケで参加いただく方が大多数を占めます。そういった方々へ聞こえについてどう

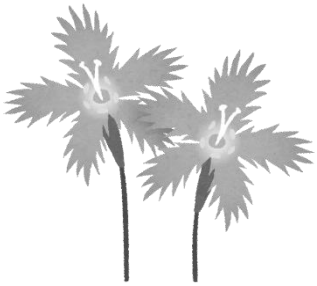
伝えるのか、どうすれば身近な方の聞こえについて興味を持っていただけるのか、関心がある方にも伝えるのが難しかった内容を、どう伝えていくのか、その難しさを感じています。それだけに「聞こえに困っている人たちの力になりたい」という思いが、店舗勤務の時より一層強くなりました。

――今後の「よるのむしのねずかん」の展望やメッセージをお願いします。

掛本　聞こえの問題はひとりで解決できるものではなく、周囲の理解や関心があって初めて前向きに向き合えるものではないかと思います。「今、電話が鳴ったよね」「えっ、鳴った？」「もう、ぼんやりしているんだから」というような会話ではなく、「もしかしたら、聞こえなかったのかな？」という考えに届くような活動をしていけたらと思います。これからも様々な場所でワークショップを開催し、活動の場を広げていく予定ですので、どこかで「よるのむしのねずかん」のワークショップを見かけたらお気軽にご参加いただけますと幸いです。

――ありがとうございました。

（取材・まとめ：長尾 康子）

メガネトップ経営企画室の掛本紀子さん

「よるのむしのねずかん」特設サイト
https://www.meganetop.co.jp/mushinone/